

ポーランドにおける言語習得の実践と成果から見る、 読解力向上と第2言語習得の両立についての考察

前在ポーランド大使館附属ワルシャワ日本人学校 教諭
埼玉県越谷市立宮本小学校 教諭 垣谷 容子

キーワード：ポーランド、母国語、外国語教育、教育制度

1. はじめに

ポーランドは中央ヨーロッパに位置し、北にはバルト海が広がる。東西南と、7か国もの国と接している。10世紀に国家をなし、14世紀に興隆を極めたが、幾度となく他国に侵略され、18世紀には3度にわたり国土が隣国に分割されて消滅した。またワルシャワは1939年にはナチス・ドイツによって侵攻され、20世紀の激動を最も見守った街である。地理的に陸上の人々の往来が多く、東西の文化的刺激の多い街、侵略の歴史の中で苦しい歴史背景を持つ街である。そのポーランドは、近年学生の学力が飛躍的に上がっており、英語力の向上にも目を見張るものがある。在外教育施設赴任中、本校では様々な学校への見学を行い、その指導方法に触れてきた。

2. 調査・研究内容

〈1〉ポーランドの教育環境

(1) 現在の教育制度

ポーランドの義務教育は18歳までで、6年間の初等学校と3年間のギムナジウム修了後、普通高校、職業学校等に進学する。ワルシャワには、特別支援学校や院内学校も含め、200を超える小学校が存在する。アメリカやカナダ、フランス、イタリアなどのインターナショナルスクールの、非公立の学校も多く、教育形態は多岐にわたる。本校職員はこれまでに、公立小・中学校、私立小学校、インターナショナルスクール、モンテッソーリ式学校など、様々な学校を見学してきた。いずれも、英語教育に大変力を入れており、保護者の意識も非常に高い。英語はもちろんの事、ドイツ語やフランス語、スペイン語などを選択で学ばせる学校も少なくない。

(2) 歴史から見る「母国語」と「英語」習得への想い

長きにわたる国家断絶の時代、人権も踏みにじられた戦争下、抑圧された共産時代を経ても、ポーランド国民の誇りと団結は揺らぐことがなかった。国民は国家断絶時もポーランド語や民謡といった伝統的文化の継承をひそかに続けてきた。母国の言語に対する強い誇りは、こういった歴史から受け継がれてきたものだ。ポーランドの不屈の精神と平和への強い想いは、学ぶべきところが多い。特に母国語への愛着と誇りが高く、長き分断の時代もこの難解な言語を途切れさせることがなかった。またその一方で、これら侵略の絶えない歴史から、国際社会の中で自国を確立する意識が高く、英語をはじめとした第2言語教育に力を入れている。現在では、世界でもトップクラスの英語教育がなされている国である。

(3) 近年の学力平均

2003年の教育改革以来、OECD (Organisation for Economic Co-operation and Development) 諸国内で行われているPISA (Programme for International Student Assessment) 調査の結果は、経済成長と同じく大きく向上を見せている。

2012年のOCED各国による学習到達度調査では、数学的リテラシー、読解力共に518ポイントだった。これは、2000年の調査開始より読解力は479、497、500、508を記録しており、数学も2003年から479、495、508と、着実に成果を伸ばしている。これは欧州においてフィンランド、エストニアに次ぐ3番目の順位であり、全体を見ても10番目に位置する。現在、ポーランドは欧州規格と変わらない教育へのGDPの6%を割り当て、OECD平均

並みのである。

また、EF EPI (EF English Proficiency Index : 英語能力指数) の調査によると、英語力は世界63か国中6位であり、「英語力が非常に高い」グループに属している。英語教育にも非常に力を入れていて、若い世代であれば大抵英語でのコミュニケーションが可能だ。

【2】ポーランドの教育機関 (Szkoła Podstawowa nr 85 を例に挙げる)

公立学校では、0~3年生の教科数は非常に少なく、国語、算数、理科、社会、音楽、図工、体育にあたる内容を一つの教科内で学習する。集中力が確立する4年生までは、体験活動を重視して、遊びながら学ぶのが一般的だ。これは、幼児教育から学校教育へのスムーズな移行を目的としており、「統合指導」と呼ばれている。1年生までは1週間の時間割に決まりはなく、当日児童の様子を見て担任が時間割を決めることから、柔軟な教育体制が見て取れる。4年~6年は自然、芸術のような幅広い科目に分類された教育が行われる。国に定められた学習内容はあるものの、担当する教員の手腕が大きく反映されることになる。

(1) 公立

ポーランド語は、インド・ヨーロッパ語族スラヴ語派の西スラヴ語群レヒト諸語に属している。名詞の格変化だけでも7格(主格、生格、与格、対格、造格、前置格、呼格)あり、文中での語の働きが格語尾によって示されることなど、非常に難解な言語として知られている。

ポーランド語は文法のみならず発音の面からみても、習得が最も難しい言語の一つとされている。公立私立に限らず、統合指導におけるポーランド語の指導が占める割合は大きい。公立校では、1年生から、日本のひらがな指導と同様、アルファベットの書き取りを繰り返し行う。書き順、字形に気をつけて書き、言葉探しをして書き取る。また、発音表記について学習する。母音に加え鼻母音、また多くの子音も存在するので、発音の指導は徹底されている。日本の様に家庭学習等で習慣的に音読は行っていないものの、発音のチェックという観点から、定期的にテストを行っているようだ。鼻母音や無声音の子音の多いポーランド語では、発音の確認が特に重要だという。日本人の耳には聞き分けの難しい発音で、大きく意味が変わってくるという。

2年生になると一気に文字数が増え、文章も複雑になってくる。しかしここでも、特に発音に注意した指導が行われる。資料から見ても分かるように、語尾の発音、語群の区切りなどを細かに指導している。



統合指導の中では、算数的活動、自然・科学的活動、生活習慣の指導なども行われる。一つの教科としてではなく、たとえば花卉の観察をしつつ、花卉の数を数えて算数の学習をするといった具合に、かなり柔軟だ。しかし根本はポーランド語の正確な取得であり、スペル、文法の確認を行いながら、花のつくりなどを学ぶ。

中学生の国語は、教材文を読み、内容を読み取る作業は日本と同様である。見学した公立中学校では、文法の授業を行っていた。①文のまとまり(文節・連文節の読み取り)②文のつながり(文の成分相互の関係)③文の中の中心(述語の読み取り。ポーランド語は、述語にあたる部分が変化しやすい)について学習していた。この時、ある文法を学ぶための例文を使用するのではなく、教材文中の文章を文法的に解析し、著者の解釈を読み取る作業をしていた。文法を学習することが、著者の意図を読み取る事につながっていた。また、教科書ではなく、課題図書を各自読んできて、その解釈について討論する授業は、3~4時間かけて行われ、年間で大体5~6冊の本で行うという。生徒それぞれの発表の中で、正しい言葉、美しい言葉を使うよう心掛けさせていた。

ちなみに、ポーランドにはレクトゥーラと呼ばれる必読書があり、小学1年生~中学3年生までの間に必ず読み深めなければならない本が定められている。自国の伝統・文化の継承のためと言われており、本国の著名な作家作品や傑作が定められている。

初等教育では理科、算数、社会といった教科を習得する中で、正しく発音し、正しい言葉を学習する事に重きが置かれていた。統合指導の中で、それぞれの教科が占める割合は定かではないが、母国語の習得に最も重点を置いているのは確かである。理科・社会・算数的活動を習得するという目的の中に、ポーランド語の確実な定着が図られていた。

中等教育では、著者、作者の意図を読み取るために文法を学び、討論の技術を磨く。レクチャー（必読書）からポーランドの自国アイデンティティ、誇り等を学び、その解釈をさらに深めるために、国語力をつけているという印象があった。

英語教育に強い力を入れているポーランドでは、小学1年生から英語教育が始まる。英語専任の教員により、テキストを用いて学習する。テキストは、市販の英会話学校で使用しているようなものだ。テキストはリスニングや会話が中心となっている。ポーランド語の文法と似ているので、子ども達にとってそう難しい言語ではない。語彙を増やし、実践的に会話をする事が望まれるようだった。放課後活動の補習授業（英語・テニス・アートなどから選択できる）でも英語を学ぶ児童が多いそうだ。



中学生になると、より一層実践的な会話が多くなる。Grammar、Readingも行うが、Listening、Speakingの割合が非常に多い。公立校といっても、地区により設備も様々で、見学に行った公立校はスマートボードやプロジェクターが全ての教室にあった。英語についてのみ、入学時の試験結果により14~15人の特別クラスが設けられ、ハイレベルの英語授業が行われていた。クラスによっては、他教科の授業も全て英語で行われるという。中学1年生の英語は週5時間、ポーランド語と同じである。加えて、ドイツ語3時間、コースによっては5時間だという。

文の成分の並び（SVO）が英語と同様で、使用しているアルファベットもほぼ同じポーランド語では、文法を学ぶのも比較的簡単だと現地の方は言う。小学1年生から、とにかく語彙とリズムになれさせている印象がある。推奨されている教科書は、英会話学校で使われているようなもので、内容としてはレベルの高いものだ。

小学校1年生からある英語の授業は、中学生になると能力別のクラスに分かれていく。実際に通っている生徒の印象だと、小学校はお遊びの英語という感覚だが、中学校ではそれぞれの領域（聞く、話す、書く）の内容がだいぶ難しく、深くなっていくようだ。

(2) その他の教育機関

（私立校 Społecznego Towarzystwo Oświatowe を例に挙げる）

カリキュラムは、公立と同様、統合指導が大部分を占めている。1年生は統合指導は週17時間、音楽、体育が2時間ずつ、宗教、倫理の時間が1時間ずつ、英語が3時間ある。

1~3年生まで、統合指導の17時間は変わらないが、4、5年生になると、ポーランド語が5時間となる。ところが6年生になると7時間に増える。4年生からは文法が主な指導になるが、6年生で授業数が増える点は、日本と異なるという事が、教師へのアンケートから判断できた。ただ、授業のスタイルなどは今回訪問した学校の中で一番日本に近いという印象を受けた。

アンケート結果から、就学児の言語レベルの差に悩まされているのは、日本と同様だった。しかし保護者の関心も高く、家庭学習やその他習い事などのサポートも期待できる様だ。公立に比べ、確かな計画に基づいた体験的活動が多いようで、異学年、他校との交流も多い。正しい言葉で発表する習慣がついていると感じる。

私立校の英語学習では、どのクラスも10人程度の少人数の中で行っていた。低学年の授業では、大きな家の絵を床に広げ、家具などの単語確認の他、「in~」「on~」などの前置詞を使って説明をさせていた。高学年はディスカッションを中心とし、実践的な英語を学習していた。英語劇や英語の合唱発表の場も頻繁に設けられている様子だった。本校との交流会では、英語劇、英語によるカリグラフィやポーランド伝統行事の紹介、理科実験のデモンストレーションなどを行ってきた。児童達は英語の原稿を用いず、ポーランド語のメモを見ながらその場で英語に直して伝えようとしていた。インプットは母国語で、アウトプットが英語という具合だ。

低学年の英語教育も、公立に比べて学習の要素が高いと感じた。それでも3年生までは書く事よりひたすら聞く事、話す事に重点を置いていると分かる。高学年になると劇や様々なプレゼンテーションを英語で行うという場面の設定が多くあり、英語力向上に大きくかかわっているとみられる。

〈インターナショナルスクール〉

我々が訪れたカナダ・インターナショナルスクールでは、通っている児童の9割がポーランド人だった。全ての教科授業を英語で行う訳ではなく、国に定められた内容は、各教科ポーランド語で行い、それらの教科をさらに英語で学習する時間が設けられていた。つまり教科ごとに、ポーランド語で教える教員と英語で教える教員が存在する。(基本教科+14~15時間) 英語による教科指導を担当する教員はネイティブのカナダ人で、教員数全30名のうち6名がこれにあたる。教科担当教員との打ち合わせを密に行い、児童の学習状況の情報も共有するという。内容を深める事よりも、あくまで言語習得に重点を置いている。

※1日7時間 週35時間 うち、14~15時間はカナダプログラム(英語による教科授業)を実施。

※カナダプログラムを行う教科は、Launage Art , Mathematics , Sience & technology , Social studies Geography & History , Art & Craft

※教職員30名 うち、6名がネイティブのカナダ人。

2年生18名の授業(カナダプログラム)では、テキストを使わず、スマートボードでペンギンについての記事を読んでいた。語彙の確認をしながらトピックを読み、質問を解く。2つ目はコウモリについてのトピックで、見た事があるエピソードを発表し合った。「いつ、どこで、何をしている時」を用い、過去形を使ったセンテンスを作って発表するというめあてをもっていた。哺乳類、夜行性と言った用語の学習も行うこの「理科を含む読解」は、英語版統合指導と言える。教科としての指導は、ポーランドプログラムの中で十分に行い、それをこの英語版統合指導で再び取りあつかう。

5年生、8名の授業(カナダプログラム)の英語の授業では、最初の20分は「r」の使い方と発音、母音を聞き取りづらいものについての説明を行っていた。その後各自週末にしたことを過去形を使ったセンテンスを作って発表し、最後にweekend rapという、短時間で世界のニュースをラップにのせた動画を視聴し、質問を出していた。

9割がポーランド人のこの学校では、英語によるカリキュラムというより、英語習得のためのカリキュラムといった具合だった。教科の実践や、発表会などの行事の中で、英語に触れ、英語で表現する目的が明確であることが、英語力上達の鍵となっている。そんな中でも、ポーランド指導要領の基礎学力は、国内でトップクラスという点が興味深い。

〈モンテッソーリプログラム小学校 Niepubliczna Podstawowa Szkoła Montessori〉

イタリアのモンテッソーリ式プログラムを取り入れた小学校は他の学校とは異なった教育形態であった。教科による時間や場所の制限はなく、児童がそれぞれその日の学習教科、内容を決め、自ら学習する。自主性を

重んじ、児童が学びたい場所で学びたい事が学べるように、いたるところに学習用具があり、教室や廊下、階段など、様々な場所で子ども達が自由に学習していた。しかし雑然とした雰囲気はなく、非常に整然とした雰囲気を感じた。

1~2週間かけて解決する課題をそれぞれが持ち、8:15~11:30までは、自習をする。午後は科目別となっていて、英語・音楽・体育・宗教・道徳のいずれかを学ぶ。

児童が自ら課題を選び学習する上で、もちろん言語活動が伴う。子ども達は自分が知りたいと思う事柄を調べるために、時には辞書を使って言葉を調べるなどしていた。教室を見渡すと、一見操作活動ばかりで言語表現を伴わないように見えるが、教室のいたる所に子ども達へのヒントや単語カード、学習ポスターなどが設置されており、音声として聞いている子もいれば書き写している子もいるなど、それぞれに必要な形でポーランド語による情報を得ていたのが印象的だった。

3. 考察

様々な学校を直に見学し、それぞれの学校のねらいや思いを知ることができた。ポーランド特有の「統合指導」は、様々な教科、領域にまたがった教科ではあるが、根幹はポーランド語の正確な取得である。繰り返し文字を学習し、言葉さがしをし、音読をする。指導内容は、日本と変わらないように思われる。ただし、学習する過程では、星空を見て知ったことをメモしたり、描いた絵の説明をみんなの前でしたりするなど、「めあて」の中心が言語領域に限らない。児童は草花や虫を観察する中で、様々な言葉に触れ、言語活動を伴った活動をしていた。「生活科」がかなり近いように思える。その中で、「正しい言葉を正しく使う事」を意識して指導しているという話を教師から聞いた。

また、低学年の時間割、様子、集中力はどうか、今何に興味を持っているか、どの活動なら積極的に取り組めるかなど、児童の様子を見てその日に決めるといふ。その児童に今一番合った方法で学習をしていくのだ。「正しい言語活動」というめあてを教師が持ちながら指導するが、子ども達はさほどそれらを意識せずいつの間にか正しく読み書きする力をつけるという事を目指しているように感じた。

モンテッソリプログラムでは、逆にプログラムを各自で決め、教師はサポートするという形だった。子ども達が「知りたい事」を知るために言葉を学びながら学習している雰囲気がある。

英語教育においては、劇の発表やプレゼンテーションの中で、「伝えたい」内容を表現しようという思いが、子ども達の表現力UPにつながっているように思う。子ども達にとっての明確な「目的」が、モチベーションを向上させているのだろう。インターナショナルスクールにおける「カナダプログラム」の中の英語は、「統合指導」の中のポーランド語と同様に感じる。英語活動を伴った教科指導である。

ゲーム性の高い活動、教科の学習の中における言語活動の中で「言語力」を培い、表現の場の設定、目的の明確化によって「表現力」を高めることで、それぞれの確実な言語力の育成につながっているのではと考える。無意識の中で学ばせ、意識を持って表現するという、奇妙な対称性を持っていることに面白さを感じた。ポーランド語と英語の教科の隔たりを強く感じないのは、言語の特性の類似もあるが、そういった学習体制から来るものなのかもしれない。

英語教育の中でも、当然表現する場を意識的に取り入れる必要があると思う。ただし、日本人の特性から考えると、正しい表現、完璧な発表を重んじるがあまり、日本人特有の英語に対する「苦手意識」「腰が引ける」態度につながってしまう恐れもある。9STO校の児童は、英語の原稿を使わず、ポーランド語のメモを用いながらその場で英語で伝えようとしていた。表現が目的ではなく、表現を手段として用いている事が、いたずらな緊張感を与えないのかもしれない。

4. 最後に

日本の学校、日本人の性質には、「統合指導」などの多くが融合した教科よりも、教科としての言語指導が合っている様に思う。ただ、生活科やその他の教科の中で言語活動を大切に扱うという事、表現する場を意識した指導をするという事は、同じくしていくべきものだと考える。

今後日本で、母国語と第2言語（ここでは英語）取得の両立を目指すためには、当然英語教育にかける時数を増やす必要がある。1年生から週3時間、インターナショナルスクールでは週14～15時間を英語による授業としていて、英語に触れている時間が絶対的に多い。しかし、ただ時間を増やすだけでは解消できない課題が、日本にはあるように思う。ゲームや歌などの体験から英語に触れることから始め、英語を介して何かを学ぶことが、生きた言語につながるのではないだろうか。そして、「伝えたい！」という目的意識をもって表現する場を、教師が積極的に設定する必要があると考える。